



# 通信

HP 学校だより  
R6.2.15  
NO.39  
文責 伊藤美佳



## 下校での一コマ

13日（火）の下校は、委員会があるため1～3年生下校でした。いつものように、野場、六栗の子どもたちを勤労体育館横の横断歩道まで見送り、玄関前で園芸委員会の先生と話をしていると、階段上で手を振る子どもが見えました。「今、帰ったところなのに」不思議に思っていると、そちらに向かってダッシュをする6年生がいました。慌てて手を振っている子どもの方に向かうと、先に到着した6年生が話を聞いてくれていました。1年生の子が転んでしまい、動けないとのこと。すばやく行動できた6年生には「あこがれ」の意と感謝を述べて、委員会にもどしました。現場に直行すると、班の子はもちろんですが、六栗の見守り隊の方と野場の見守り隊の方がついてくださっていました。幸いケガは軽く、歩きはじめることもできたので一安心でした。

「ありがたさ」と「あこがれ」を感じたのは、見守り隊の方々の連携です。下校する低学年の子どもたちに付き添って安全を確保してくださっていることはもちろんですが、今回のような場合、子どもたちが集まっているところを見て、その場に行き、子どもたちとともにいてくださったこと、必要に応じて学校に連絡してくださったことです。「おらが学校の子どもたち」という広い心で見守ってくださっていることに感謝の気持ちでいっぱいです。

また、学校に走って緊急を知らせに来た3年生の子の行動にも「あこがれ」ました。当初、見守り隊の方が「学校に連絡した方がいいけど、携帯電話をもってきてないなあ」と言われたのを聞いて、「すぐだから、僕が行ってくる」と走り始めたようです。自分で判断して、行動できる力は、本校が教育目標として掲げているものです。転んだ1年生も絆創膏をはって、落ち着くと歩けるようになりました。その子に付き添いながら、家路に向かう3年生の子ども姿は、とても頼もしく感じました。

子どもたちに「自分で考える力」そして「自分で判断し行動する力」をつけるにはどうしたらよいのでしょうか。家庭と地域、学校がともに同じ方向を向いて子どもたちを見守り、導いていけたらと考えています。大人が「転ばぬ先の杖」を出すではなく、子どもたちが転んだときに「どうしてだろう」、「どうすればよかったのかな」と考え、自分で立ち上がり、再度自分で考えた方法でチャレンジしていける。そんなことを願っています。「自分でできた」は、子どもの大いなる自信となり、次に進む勇気を与えてくれます。

## 内灘町に募金のお金が届きました

2月9日（金）に内灘町の応援に行かれた役場の方が、内灘町の教育長様に募金のお金を届けてくださいました。今後の復興のために使っていただけるそうです。被災された方々は、これで終わりではありません。「相手意識」を大切にしながら、今後のことも考えていければと思います。ご理解とご協力 本当におありがとうございました。

